広報 なりた
市民を大切にする市政

成田歴史玉手箱

歴史と伝統文化のまち・成田。市内には、歴史ある文化財が多数あります。

昭和16年7月、印旛沼の水害。下方から対岸の印旛村平賀の台地を望む（宍倉日出夫氏所蔵）

利根川・印旛沼の水害

かつて水との闘いは宿命であった

「昔は3年一作のどん底の生活だった」と以前長沼の人から聞いたことがあります。これは3年に一度稲が実り収穫があればよかったという意味で、利根川や根木名川周辺で暮らす人々の、水害に苦しむ悲痛な思いを象徴する言葉でした。

明治時代には利根川の堤防が何度も切れ、松崎地区に残る「洪水之記」（明治29年9月）の中に、「印旛郡木下（きおろし）町の圦樋（いりひ）（水門のこと）破壊、洪水は一直線に印旛沼に突入した。ついに十三日大竹区湯之木地先で決壊、たちまち八生（はぶ）村から公津村に至る耕地は一円海と化した」と、激流があっという間に集落をのみ込んだ様子が記されています。

また、明治43年の洪水では各所で利根川・印旛沼の堤防が決壊し、安西・長沼地区の民家がほとんど水没し、その水先は新勝寺の石段まで達したと言い伝えられるほどでした。

これらを契機に、明治後期から昭和初期にかけて利根川の河川改修工事が行われ、その後、利根川の堤防は切れることはありませんでした。しかし、それに代わって人々を苦しめたのは内水（うちみず）による水害でした。内水とは、利根川の水位が上がると根木名川や印旛沼の水を排出する水門を開けることができず、行き場を失った水が周辺の耕地に浸水し氾濫することです。昭和になると根木名川築堤工事、安西排水機場の設置など治水の努力が続けられましたが、住民は内水からは逃れられない宿命でした。

昭和46年台風25号による被害の様子（JA成田市創立50周年記念誌より）

古老たちが当時の様子を今でも生々しく語るのは、昭和13年と16年の水害です。豊住村・中郷村・久住村・印旛沼沿岸部の耕地は、見渡す限り冠水状態。中でも安西地区は人家や耕地のすべてが水没し、水が引くまで30～40日もかかったそうです。お米は一粒も取れない農家が続出し、何もかも腐りひどい悪臭に悩まされたといいます。

戦後、印旛沼国営干拓事業や空港関連事業の一環で行われた根木名川改修工事によって、現在水害の脅威は無くなりましたが、内水被害は昭和50年ころまでは頻繁にあり、それまでの住民の暮らしは、まさに水との闘いの歴史でもありました。

昭和16年7月、台風の上陸により根木名川が決壊し安西地区は一夜にして家屋が水没した（豊住小学校所蔵）

編集後記

本号の表紙は「成田ふるさとまつり」の子ども神輿（みこし）です。年々盛大になり、すっかり成田の祭りとして定着しましたが、第1回は昭和55年9月に開催された「成田ニュータウン秋祭り」です。ニュータウンに住む人たちが、祭りを通してお互いの親睦を深めようと始めたもので、このときのメイン会場は中台小学校予定地でした。当時からかかわっている人にとっては、現在の盛況は大変感慨深いのではないでしょうか。草地の中での開催。まだ無名だったピーター・フランクルさんの大道芸。おばけカボチャコンテストというのもありました。取材をしながら、いろいろな場面が脳裏に浮かびました。祭りはよい思い出づくりの場でもあります。神輿を担いだ子どもたちにとっても忘れられない夏になったはずです。

広報なりたは再生紙を使用しています。